

芸術の社会的処方

— 日米比較から考える可能性と社会実装 —



高齢になっても、認知症になっても、人は喜び、楽しみ、幸せを感じながら生きることができます。

本シンポジウムでは、医療・保健・福祉と芸術をつなぐ「芸術の社会的処方」に焦点を当て、日米の先駆的な実践を比較し、その意義、効果の捉え方、社会実装の可能性を考えます。



社会的処方（Social Prescribing）とは？

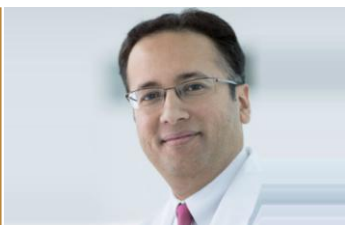
医師や専門職が、薬や治療だけに頼らず、地域の人や活動、芸術・文化、自然、運動などの非医療的な資源を「処方」し、孤独や社会的孤立、意欲の低下などを改善し、心身の健康と生活の質の向上を目指す仕組みです。

登壇者



ピーター・J・ホワイトハウス

Peter J. Whitehouse, MD, PhD
ケース・ウェスタン・リザーブ大学
神経学・認知科学・加齢研究 教授。
「The Myth of Alzheimer's」共著者。
脳の健康と加齢を心理・社会・環境から捉える“ecopsychosocial”の視点で、芸術と健康の役割を研究している。



アルデシール・Z・ハシュミ

Ardeshtir Z. Hashmi, MD, FACP
クリーブランド・クリニック老年医学
イノベーション冠教授／老年医学
センター部門長。患者中心の医療を
実践し、臨床現場で芸術の社会的処
方に取り組む。Social Prescribing
USAアドバイザーも務める。



藤井 昌彦

Masahiko Fujii, MD, PhD
仙台富沢病院・山形厚生病院統括理
事長／東北大学加齢医学研究所客員
教授（臨床加齢医学研究分野）。認
知症情動療法の研究・実践に取り組
み、現在はARTRIPの効果をヒューマ
ンセンシング等を用いて科学的に検
証している。



林 容子

Yoko Hayashi
一般社団法人 Arts Alive 代表理事・
ARTRIP創設者。対話型鑑賞プログ
ラム「ARTRIP」を国内の美術館・
医療・福祉施設等で実践。現在、芸
術の社会的処方の日米比較研究と日
本での社会実装に取り組んでいる。

2027年
2月20日（土）
13:00-17:30

国立新美術館
講堂
〒106-8558
東京都港区六本木 7-22-2

日英同時
通訳付き

定員
200名

参加費
医師：6,000円
一般：3,000円

お申込み（リンク）



超高齢社会に、 新しい選択肢を。

高齢期の課題は、病気や身体機能の低下だけではありません。
孤独や社会的孤立、意欲の低下、生きがいの喪失など、
薬物療法だけでは解決できない課題があります。

いま世界では、芸術、自然、運動、地域活動などの
非医療的な社会資源を、健康やウェルビーイングを支える
手段として医療・福祉につなぐ「社会的処方」
(Social Prescribing) への関心が高まり、これらを既存の医療や
ケアの仕組みの中で実装する試みが始まっています。



日本には、医療と介護、地域の生活支援をつなぐ
地域包括ケアシステムがあります。
では、この仕組みの中に「芸術の社会的処方」を
どのように組み込むことができるのでしょうか。

考えるべき 4 つの問いで



誰がつなぐのか

誰が必要な人を見つけ、芸術活 どのような芸術やプログラムを
動や地域資源へつなぐのか。 選び、その人らしい参加を保障
するのか。



何を届けるのか



どう確かめるのか

効果と質をどのように評価し、
検証していくのか。



どう続けるのか

誰が費用を負担し、持続可能な
仕組みにするのか。

本シンポジウムでは、米国と日本の先駆的な実践と研究を手がかりに、
「芸術の社会的処方」を、日本の医療・介護・地域包括ケアの中で
どのように社会実装できるのかを考えます。



「病気を治す」だけでなく、
「その人がよりよく生きること」を支える社会へ。



シンポジウムのゴール

- ・ 芸術の社会的処方の可能性を共有する
- ・ 日本の地域包括ケアにおける実装の道筋を探る
- ・ 政策提言につなげ、継続的な仕組みづくりへ

詳細・お申込み

ウェブサイト
最新情報・お申込みは
こちらから

